

戦国非情 結城氏・多賀谷氏伝 第二部

結城譜代家臣と徳川家臣団

結城秀康の死。

関ヶ原の戦いの翌年、慶長六年（一六〇一年）七月、越前北ノ庄に入国した結城秀康は六十八万石の大大名に相応しい城郭と城下町の建設を急いだ。おおよその完成に五年を要した。さらに秀康は大量の家臣団を召し抱えた。家臣団の総数は四百九十七家に達し、内訳は一万石以上が十一家、五千石以上六家、千石以上七十四家、六百石以上

四十三家、三百石以上百六十四家、百石以上百八十七家、百石未満十二家でその合計は五十五万四千石であった。差し引き十二万六千石が藩主分とすれば、六十八万石の大大名の体面を保つには苦勞したのであろう。

家臣団の主な出身地は三河七十八家、下野^{しもつけ}六十五家、遠江^{とおとうみ}五十家、美濃三十七家、尾張三十家、武蔵二十七家、越前十九家、相模十八家、駿河十七家、甲斐十六家、上野^{こうずけの}十三家、近江十家、信濃九家、常陸八家、摂津^{せつづ}、河内^{かわうち}が六家、丹波^{たんば}、伊勢が四家、若狭三家、下総^{しもふさ}二家、その他（不明を含む）が七十五家。

千石以上の大身は三河二十五家、美濃十四家、尾張十家、下野九家、遠江、武蔵が四家、相模、駿河、近江が三家、越前、甲斐、下総、常陸が二家、上野、信濃、丹波、若狭が一家、その他（不明を含む）四家で計九十一家。

一万石以上は三河の四家。本多富正（三六七五〇石）、今村盛次^{もりつぐ}（二五〇五〇石。三五〇五〇石との記載もあり）、永見右衛門^{ながみ うゑもん}（一五三五〇石）、清水丹後^{しみず たんご}（一一〇二〇石）である。尾張は二家、久世但馬^{くせ たじま}（一万石）、落合主膳^{おちあひ しゅぜん}（一万石）。下総も二家、多賀谷左近^{たがや さこん}（三万二千石）、山川讚岐守^{やまがわの さんせきのかみ}（一万七千石）である。以下、美濃の吉田修理^{よした しゅり}（一万四千石）。甲斐の土屋左馬助昌春^{つちやまの すけまさはる}（三万八千石）。若狭の江口石見^{えがみ いわみ}（一万石）で計十一家である。

下野は結城氏の旧領国であるから当然としても、三河、遠江が多数を占めるのは徳川家との係わりからである。

本多富正は秀康が豊臣秀吉の養子（人質）として大坂で暮らしていたとき、徳川家から遣わされた側小姓である。今村盛次は三河の出身、家康に召しだされて御納戸役^{おなんどやく}（将軍

家の金銀、衣服、調度の出納を管理する役)を務め、秀康越前入国に伴い、付家老となった。

土屋左馬助の父、金子^{きだみつ}定光は武田信玄、勝頼に仕え、織田方との戦いで討ち死にした侍大将である。二歳だった左馬助は家臣に養われ、成人後、徳川家に出仕した。家康の小姓を務めたが、実直な性格を見込まれ秀康の側近に登用された。

多賀谷左近を除き、三万石以上の大身はいずれも徳川ゆかりの家臣である。一方、結城氏譜代重臣では多賀谷左近(下総)が三万二千石、結城一族の山川^{しげみつ}讚岐守(下総。山川氏の祖、山川^{しげみつ}重光は結城氏の祖、結城朝光^{ともみつ}の庶子)が一万七千石、岩上^{さきょう}左京(下野)が四千石、水谷^{みずのやぎょうぶ}刑部(下野)水谷^{みずのやひょうぶ}兵部(下野)が千石である。多賀谷、山川、岩上、水谷の四家は結城四天王と称された武将である。いずれも旧領地の石高であり、越前移封にともなって加増されたものではない。

前述のように結城譜代家臣(下野、下総、その他)七十一人のうち、千石以上は上記五人を含めて八名しかいない。二百五十石~六百石が十三人、二百石が二十二人、百五十石が十九人、百石が六人、五十石が三人である。

※数字は結城秀康給帳(家臣俸禄控。福井市史)より。

結城譜代家臣は移封にともなつての加増はほとんどなかった。そのために越前への赴任を辞退した下級家臣も少なからずいた。秀康は結城姓を名乗っていたが、越前北ノ庄藩を支配したのは三河出身を中心とした徳川家臣団で結城譜代重臣は権力の中核から外されていた。

江戸、京、大坂を結ぶ要害の地、府中城主には本多富正(三河)、丸岡城主には今村盛次(三河)、大野城主には土屋左馬助(甲斐)、勝山代官には林長門^{ながと}(三河。九八四〇石)が配され、徳川家臣団主導であったことが一目瞭然である。辛うじて越前加賀国境の坂北柿原郷に多賀谷左近(下総)が配された。

慶長十年五月一日(一六〇五年六月十七日)、徳川秀忠に対して征夷代将軍^{せんげ}宣下。同時期、結城秀康も権中納言^{ごんちゆうなごん}に昇任した。その間、越前の国造りに精力を注ぐかたわら、慶長十一年に幕府から江戸城普請手伝いを命じられている。これには多賀谷左近があたった。それを終えると禁裏普請^{きんり}の惣督^{そうとく}(責任者)を命じられ、さらに家康が伏見城を離れると(※伏見城は徳川将軍の京都での居城)伏見城在番役(留守役)、翌十二年正月から駿府城改築の助役と(本多富正があたる)幕府から次々と公役を課せられた。諸大名を総動員した徳川方の城普請、禁裏造営、河川改修、道路工事の、いわゆる家康

の天下普請に北ノ庄藩も駆り出されたのである。秀康はこの時期多忙を極めた。この頃より秀康の健康は悪化し、業病に苦しむことになる。

家康は病床の秀康を案じ、昵懇の公家衆や僧侶を見舞いに遣わせたのだが、面会が叶わなかった。病状悪化もさることながら、腫れものが顔を覆い、鼻が削がれる異様な容貌を人前に曝すことを嫌ったのである。

衰弱も著しく、書状の末尾にも花押でなく印判を用いて、「病気なので印判を用いている」と相手方に詫びている。秀康の病気は徳川一門だけでなく、諸侯、宮廷にも知れ渡り、諸侯からの見舞いが相次ぎ、宮廷でも後陽成天皇が神楽を舞わせて平癒を祈祷していたとの記録が残っている。

慶長十一～十二年(一六〇七年)の冬は伏見城で養生した。秀康は帰国を望んだのが、家康が病に伏せている秀康を案じ、厳寒の北国下向を避け、春まで待つようにと勧めたのである。

慶長十二年三月一日(一六〇七年三月二十八日)、秀康は伏見を発ち北ノ庄への道についた。此の日、夕方より天候が急変し、雷鳴轟く豪雨となり、不吉の前兆となった。着城日の記録は無い。帰国後、病状は一進一退を繰り返しながら慶長十二年閏四月八日(一六〇七年六月二日)死去した(享年三十四歳)。翌九日永見右衛門(前述。享年二十四歳)が、十一日土屋昌春(前述。享年二十七歳)が殉死した。(福井県史「通史編」より引用)

※ 福井県郷土史叢書(雑記の意)の秀康家臣履歴に右衛門の母は家康の従妹と記載されている。又秀康の生母・於万の方(長勝院)は三河国永見吉英の娘である。右衛門の父は永見吉治。吉英と吉治の関係を示す記録は見当たらないが、極めて近い親族であったであろう。

さらに本多富正らの重臣も追隨する動きを見せた。この事態に幕府はすぐさま対応した。四月十六日、秀忠より、二十四日には家康から、富正に、二十五日には幕閣の本多正純から重臣あてに殉死を固く禁ずる指示がなされたのである。その内容は「殉死は沙汰の限りであり、生きて若い忠直(十一歳)を守り立てることこそ忠節である。もしこの旨に背くなら越前は肝要の地であるから別の人間に与え(北ノ庄藩改易)、子孫まで絶家にする。殉死した者は一族すべて成敗(死罪)に処す」という厳しいものであった。(越前松平家譜より)

※ 秀康の生母・於万の方は家康の正室・築山殿の付女中であった。家康は築山殿の愷氣を恐れ於万の方を側近の本多重次に預け、重次の計らいで於万の方は浜松の中村家

で於義丸（秀康）を生んだ。秀康（十歳）が養子（人質）として豊臣家に入ると、重次嫡男の仙千代（十二歳。後の成重。丸岡藩主）が側小姓として同行した。まもなく成重に代わって富正がその役目を努めた。富正は秀康の最古参の側近であった。

- ※ 本多富正の父・本多重富は重次の兄。富正と成重は従兄弟。
- ※ 慶長二十年（一六一五年）七月、武家諸法度が制定されたが、この時点では殉死禁止は明文化されておらず、口頭での禁止のみであった。明文化したのは天和三年（一六八三年）、五代将軍、綱吉の時である。

北ノ庄藩の殉死は幕府からの厳しい通達により、永見右衛門とその介錯人である田村金兵衛、土屋昌春と同、長沼四郎右衛門のみで止まった。

多賀谷左近が死去したのは秀康の死から百日後の慶長十二年七月二十一日（一六〇七年九月十二日）であった（福井県史、柿原郷墓碑では享年四十一歳となっているが、三十一歳との説有り・・・後述）。病死とされている。

左近三経の死について、多賀谷家譜では本多富正による毒殺の可能性を示唆しているが、その証拠となる史料は存在しない。論拠として考えられるのは、

「関ヶ原合戦以降、徳川家では豊臣家壊滅の機会を狙っていた。北ノ庄藩は親豊臣派大名と目されてきた。それを抑える役割を本多富正が担っていた。秀康の死去後、富正は親豊臣派を一掃するために、最初に多賀谷左近三経を毒殺した」であろう。その可能性もあるという話である。

結城秀康譜代家臣（親豊臣系家臣団）を排除するために幕府の謀略、本多富正の謀略が開始された。それが「久世騒動」である。

久世騒動

（久世騒動は後に柿原郷多賀谷氏の廃絶に関わってくるので詳しく記述したい）

北ノ庄藩は秀康嫡男、忠直が就いた。十二歳である。藩政は本多富正、今村盛次らの重臣に委ねられた。父の死から四年後の慶長十六年（一六一一年）九月、忠直（十六歳）は秀忠の三女、勝姫（十一歳。母は秀忠継室、江。三代将軍家光は同母弟）を正室に迎えた。徳川宗家との絆を強め、親藩筆頭として越前は盤石と思われたのだが・・・。

- ※ 忠直と勝姫の間に一男二女がいる。光長（一六一六年出生）、亀姫（一六一七年出生）、鶴姫（一六一八年出生）

慶長十七年、越前を揺るがす大騒動が勃発した。きっかけは領民の刃傷沙汰であった。後世「久世騒動」と呼ばれ、直々に大御所（家康）、将軍（秀忠）の裁定を仰ぎ、世間

の耳目を集めた大騒動であった。

久世騒動についての記述は資料によって異なる。まったく正反対の記述が横行している。ここでは福井県立図書館・福井県郷土誌懇談会編「福井県郷土叢書 忠直年譜」を採用したい。込み入った事件であり、資料を読むだけで経緯を理解することは困難である。「久世騒動」の背景として以下の事を念頭に入れていただきたい。

北ノ庄藩（六十八万石）は結城藩（十万千石）を母体に、方々から家臣を募った寄せ集め集団であった。その寄せ集め集団を統率していたのが結城秀康であった。結城秀康という統率力に優れた藩主が死去し、幼い忠直が後継となると、藩政は重臣に委ねられた。なかでも徳川系家臣団の頭目であった本多富正（府中城主）に権力が集中した。幕府との折衝にも富正があたっていた。勝姫の輿入れの際、府中の本多富正の館で休息し、お齒黒の儀式を行った。筆を入れたのは富正の妻で、勝姫にお伴して北ノ庄城に入城した。将軍秀忠がこれほど富正を重用するには理由がある。

江戸から遠く離れた北国越前の北ノ庄藩を徳川家の支配下に置くため、幕府は本多富正にその役割を与えていた。将軍家は勝姫輿入れの儀式を利用して本多富正に徳川系家臣団筆頭のお墨付きを与えたのである。

だが、本多富正への権力集中に反発する一派が存在していた。結城秀康に召し抱えられた譜代家臣（非徳川系。幕府は彼等を親豊臣系と見ていた）であった。今村盛次（丸岡城主）は徳川系家臣でありながら、富正との対立からその旗頭に担がれた。

藩主忠直は父、秀康同様徳川家への屈折した感情を抱いており、徳川宗家に極めて近い本多富正を疎んじる気持ちがあったといわれている。

久世騒動に関与した主だった藩士

本多富正派 本多富正（三万九千石） 久世但馬守（一万石） 竹島周坊守（四千石）
弓木左衛門（二千石） 上田隼人（六百石）

反・本多派 今村盛次（二万五千五十石） 中川出雲守（一万五千五十石） 岡部自休（千七百石） 清水丹後守（一万二千二十石） 林伊賀守（九千八百四十石） 谷伯耆守（三千石） 広沢兵庫（六百石） 落合美作（千石） 牧野主殿（二千四百石。後に離脱）

当時十八歳だった藩主・忠直の事件処理に不手際があり、久世一族、及び討手方合わせて三百五十人余が命を落とした。騒動は天下に広まり、幕府が裁決に乗り出すという

事態に発展した。

久世騒動顛末

家老久世但馬の知行地の民・某（甲）が諍いの末、町奉行岡部自休の知行地の民・某（乙）を殺害する事件が起きた。このことが表沙汰になり、乙の親族が知行主の岡部自休に訴えた。岡部はこの事を久世但馬に伝え、犯人の引き渡しを求めたが、久世は本多富正、竹島周防などと協議した結果、犯人を匿い、事件を握りつぶした。

岡部は本多富正と対立していた今村盛次、その同志である清水丹後、林伊賀と相談し、中川出雲から藩主忠直に訴えたようとしたが、本多、竹島がこれを阻んだ。

（忠直の母は秀康側室・中川一元の娘（清涼院）。中川出雲は一元の嫡男。出雲は忠直の叔父にあたる）

岡部は激怒し、「私が訴えても、奸臣（本多富正）に阻まれて藩主に達しない。私は事の次第を幕府に訴え、奸臣どもの悪事を暴く」と語り、直ちに江戸に向かった。牧野主殿は岡部への加勢を申し出て同行することになった。

岡部、牧野が江戸に発ったことを知らされた忠直はすぐさま人を遣わし、「このような小事で幕府の裁定を仰ぐには及ばない。直ちに戻って久世但馬と対決すれば、理非は明らかになる」と伝えた。両人は藩主の言葉に受け入れ帰国した。牧野は藩主の心を煩わしたことを悔い、高野山に入り剃髪して入道となった。

忠直は但馬に対して速やかに岡部と対決するように命じたが、但馬は命令に従わなかった。久世但馬誅伐が決せられた。

今村盛次、清水丹後、林伊賀ら反本多富正の面々はこの機会を捉え、本多富正の失脚を画策した。久世但馬討伐を本多富正に命じるよう、忠直に進言したのである。本多富正が久世但馬討伐を拒否すれば君命に背いた咎により、本多を失脚させることができる。受け入れれば本多は同志である久世を討伐し、自らも返り血を浴び、一派は分裂するだろう。本多富正一派を失脚させる絶好の機会と捉えたのである。

忠直は今村盛次らの進言を受け入れ、富正に登城を命じたが、富正は盛次らの企てを察し、己が誅伐されることを警戒し、領地の府中から動かなかつた。忠直の再度の命令に、身の安全を保障するため、忠直からの人質を賜ることを求めた。人質が渡されたことにより、登城した富正は忠直から久世但馬守上意討ちを命じられ、富正はこれを受け入れた。

慶長十七年十月十八日（一六一二年十一月十日）、本多富正は家臣たちに久世但馬守屋敷を包囲させ、単身屋敷に乗り込み、余人を交えず但馬と面談をした。席上、富正は但馬に自刃を求めたが、但馬は拒否した。会談を終え、富正が帰ろうとすると、久世家臣の木村八右衛門らが富正に斬りかかろうとした。但馬はこれを留め、「私の最後は目前に迫っている。私の死後、私の存念を語ることが出来るのはただこの人、本多富正殿を頼るのみである。決して手出しをしてはならぬ」と固く制し、富正を門外に送り出した。

直ちに攻撃が開始された。久世方ではすでに婦女子、老人は脱出しており、屋敷内の屈強な家臣百五十二人が応戦した。激しい攻防戦が続いたが、その日は決着がつかず、一夜が明けた。翌朝、屋敷から火の手が上がった。但馬が火を放つように命じ、炎のなか自刃したのである。すでに家臣の多くは討ち死にしており、残った家臣も但馬の後を追って自刃した。久世方には一人の生存者もいなかった。寄手の討死は二百七人とされている。

その日（十九日）のうちに忠直は使者をおくり、弓木左衛門、上田隼人に死を命じた。二人は自刃し、家臣たちは討手と戦い主人の後を追った。竹島周防は城内の櫓に監禁され、あらためて詮議を受けることになった。久世但馬を誅伐した本多富正は咎めを受けず、失脚を狙った今村盛次らの目論見が狂ったのである。

このとき柿原郷、多賀谷氏は泰経の代になっていたが、家臣の武者奉行、丹下長左衛門に兵を率いさせ今村盛次の屋敷の警護にあたらせた。盛次の屋敷は本多富正の屋敷に近い。久世方の反撃、あるいは本多富正の襲撃に備えるためである。

越前の騒動は幕府の知るところになり、慶長十七年十一月二十七日（一六一三年一月十七日）、本多富正、今村盛次らが江戸に呼び出され、江戸城西の丸において、家康、秀忠の立ち会いのもと、土井利勝ら幕閣らによる尋問がおこなわれた。今村盛次は騒動の発端は久世但馬の罪状を本多富正、竹島周防らが隠ぺいしたことで引き起こされたものであるとして、

「あきらかに理は岡部自休にあり、非は久世但馬にあります。藩主・忠直公も岡部の訴えを受け入れられ久世の罪をお認めになった。しかるに本多、竹島らは忠直公の御意向に背き、訴えを退けたのです。これは本多、竹島らの日頃の驕りからくるもので、若き藩主をないがしろにする不届きな行為に他なりません。お上におかれては厳正な裁きを下さいますようお願い申し上げます」と言上した。

一方、本多富正は「岡部自休が訴える内容は、私はもとより岡部に理があることは承知しておりましたが、久世但馬は武名の高い宿老、今百姓の訴えにより処罰することを見るに忍びなく、そのため久世の側にたって岡部の訴えを聞き入れなかったのです」と弁明した。

竹島周防も「越前にお入りになったはじめに、秀康公は『私は国を得て喜んだことが二つある。一つは北陸の要地に拠ることになったこと。二つは有名な士である久世但馬を家臣に迎えることが出来たことである』と仰おっしゃって、久世の武勇を感心されて、他の家臣に比べて厚遇されたのです。先君がこのように愛された人物であったため私も尊敬しておりました。事の理非を論ぜず、岡部の訴えを退けたことは先君の思いを慮おもってのことです。このことにより重罪を被こうむることになるともまったく悔いることはありません」と述べた。

家康、秀忠は裁定を下した。本多富正の失脚を企て騒動に持ちこんだ今村盛次に非があると断じたのである。富正の罪は不問にされ、今村盛次らに処分が下された。尚、竹島周防は罪に問われなかったが、騒動の責任をとり自刃した。

処分内容

今村盛次	岩城 <small>いわき</small> （現福島県いわき市）鳥居氏預け
中川出雲	小諸仙石氏預け
岡部自休	死罪
清水丹後	仙台伊達氏預け
林 伊賀	上田真田氏預け
谷 伯耆	改易
広沢兵庫	松平丹後（横須賀藩主・松平重勝 <small>しげかつ</small> の嫡男）預け
落合美作	紀州藩預け

丸岡城主であった今村盛次の後任は本多成重なるしげとなった。成重の父・重次しげつぐは本多富正の父・重富しげとみの弟であり（前述）、成重と富正は同年（一五七二年生まれ）とされている。成重を推挙したのは富正であった。対抗勢力を排除した富正は北ノ庄藩を牛耳ることになる。これは幕府の意向でもあった。

豊臣家との対決は目前に迫っている。越前の親豊臣勢力を追放し、徳川系家臣でまとめる、これが家康の狙いだった。久世騒動始末もそれに沿ったものであり、この理非で裁断を仰おんがうごうとした今村盛次側に勝目はなかったのである。

久世騒動が落ち着いた後、家康は本多富正を呼び出した。表向き騒動について叱責した

のだが、富正の（徳川宗家への）忠義を大いに称賛したという。本多富正と幕府は裁決の前から通じていたのである。親豊臣派家臣を駆逐する機会を幕府は探っていた。たまたま北ノ庄藩に久世騒動が勃発した。それを利用したのである。

さて柿原郷・多賀谷左近泰経^{やすつね}は今村盛次の屋敷を防御したが、当主泰経が若年であり、動員されたのみということで重い処分は免れた。但し、多賀谷氏領地から柿原の八百八十一石と指中村の七百七十一石が取り上げられ本多富正に与えられている。

富正は柿原郷にも触手を伸ばしていたとされている。忠直は幕府に金津築城を申し出ているが、それは金津に己の居城を構えようとする富正の意図であったと多賀谷家伝は記している。金津城築城は結局実現しなかった。その理由は後ほど述べたい。

※ 多賀谷氏から本多氏に柿原郷、指中の領地が移った年代は、多賀谷左近三経の死後であることは確かだが、時期は不明。だが、三経死後、柿原郷多賀谷氏の領地が大きく削られているのは事実である。後で述べるが慶長十八年（一六一三年。三経の死から六年）に北ノ庄藩は坂北郡に金津奉行を置いている。このことは多賀谷氏の領地であった坂北郡がすでに北ノ庄藩の支配下になっていることを意味している。

大坂の陣

慶長十九年十一月十九日（一六一四年十二月十九日）、大坂冬の陣開戦。親徳川派の本多富正が掌握している北ノ庄藩は本多富正（府中城主。三万九千石）と本多成重（丸岡藩主。四万石）が主力となって天王寺近辺に布陣した。二人は松平忠直の家臣（家老）でありながら家康直々の指揮下に入った。越前兵は大坂城攻撃に加わるが、血気にはやる忠直（二十歳）は軍令を無視して突撃し、真田幸村指揮下の鉄砲隊に狙い撃ちされ多くの将兵を失った。家康は富正と成重をよびつけ、厳しく叱責した。大坂冬の陣は忠直にとって屈辱の初陣に終わった。

慶長二十年四月二十六日（一六一五年五月二十三日）、大坂夏の陣合戦の火蓋が切られた。五月七日、（六月三日）、越前兵は真田幸村勢と激突、幸村を討ち取り、さらに大坂城一番乗りを果たした。淀君と秀頼は翌八日、自害。大坂城は炎上、豊臣家は滅亡した。夏の陣での越前兵の活躍は称賛された（越前兵が夏の陣で取った首級^{しゅきゅう}三六五〇は東軍でも群を抜いていた）。

本多富正自身も一番槍を称えられた。冬の陣での雪辱を果たしたのである。恩賞として富正は黄金五十枚が贈られた。

忠直には家康から名器の茶入れ、秀忠から脇差を贈られ、加増は後日にということであったが、翌年家康が死去したことにより、約束は実現しなかった。

忠直配流処分

夏の陣が終り、豊臣家が滅亡した日から三ヶ月後の慶長二十年七月十三日（一六一五年九月五日）、元号は元和げんなになった。翌元和二年四月十七日（一六一六年六月一日）徳川家康死去、享年七十五歳であった。忠直の乱行が目立ち始めたのは元和四年頃からである。家康という絶対的な存在が消滅し、一時的に幕府の權威に陰りが見えたことも、忠直の乱行を許したのかも知れない。

家康の長男は信康のぶやす。母、築山殿は信長への謀反の疑いで、家康によって殺害され、信康も自刃じじんに追い込まれた。次男は秀康。本来、徳川宗家は秀康が継ぐのが筋だが、秀康は秀吉の養子にだされたと云う理由で、弟の秀忠が継いだ。だが、資質としては秀康が優れ、彼こそ將軍職に相応しいというのが衆目の一致する所だった。

秀康は権力の非情さを知っている。兄信康は信長の命令とはいえ、父・家康に自刃を命じられた。一時は豊臣家の後継者と目された秀吉の甥、秀次は秀頼が生まれると、遠ざけられ、自刃を命じられた。のみならず秀次の側室、侍女、遺児たちも斬首された。親兄弟といえども、いったん疑惑を与えれば肅清される、それが乱世の掟である。

兄信康の自刃、秀次一族の虐殺を目撃した秀康は権力がもたらす非情さ恐怖を理解していただろう。不満を抱きながらも己の身を守るために家康には逆らわず、弟の將軍秀忠に対抗する姿勢を見せなかった。だが、忠直にはそれができなかった。

忠直が不満を抱いたのが尾張家（六十二万石）、紀州家（五十六万石）、水戸家（三十五万石）と北ノ庄藩（六十八万石）の扱いの格差である。尾張藩の藩祖は家康九男義直、紀州藩は十男頼宣よりのぶ、水戸藩は十一男頼房よりのふさである。

家康の次男だった父、秀康は関ヶ原合戦で上杉景勝、佐竹義宣の関ヶ原参陣を防ぐ功があったが、弟の尾張、紀州、水戸の藩祖諸侯は合戦に参加するどころか、生まれてもいない。彼等は甥の忠直よりも年下である。

※ 忠直は文禄四年（一五九五年）生まれ。義直は六歳、頼宣は七歳、頼房は八歳下である。

尾張、紀州、水戸藩が御三家として位置づけられ、とくに尾張、紀州藩は將軍の繼承権を与えられた。ならば次男である秀康が藩祖の北ノ庄藩も同列に扱われるべきと忠直は思ったであろう。だが、石高こそ三藩を上回るものの、北ノ庄藩は格下に扱われた。さらに家康の死後、幕府の北ノ庄藩・忠直に対する態度は明らかに変化した。家康生存中の慶長十九年の幕府よりの書状では忠直を「越前少将様」と記しているが、元和二年

の書状では「越前宰相殿」となっている。同年における義直（尾張藩主）を「尾州宰相様」、頼宣（紀州藩主）を「常陸様」、頼宣（水戸藩主）を「少将様」と記している。自尊心の強い忠直には腹に据えかねたであろう。

忠直が幕府に反抗的な態度を見せ始めたのは元和四年（一六一八年）からで、二十三～二十四歳の頃からである。この年は病気を理由に参勤せず、元和六年の参勤は今庄まで行きながら、体調不良を理由に引き返している。参勤は將軍に対する大名の服属儀礼であり、これを怠るといことは、徳川將軍を軽んじる事に他ならない。さらに元和八年、徳川家最大の行事である日光で営まれた家康七回忌法要にも関ヶ原まで行きながら引き返し、参列しなかった。前小倉藩主、細川忠興（隠居）もこの事態を前代未聞とし、「御帰り候事成らざる様のご処置これあるべし」と、処分が必要と述べている（細川家史料）。各諸侯も親藩、譜代、外様大名問わず固唾を呑んで幕府の対応を見守っていた。

將軍秀忠にとって忠直は甥であり、娘婿ではあるが不問にすれば幕府の権威が失墜する。秀忠は娘の勝姫に腹心の旗本を遣わし事情を探った。その結果、「忠直、病気にて参列かなわず」として処分を見送った。

だが、忠直の傍若無人ぶりは改まらなかった。家老の本多富正（府中城主）、本多成重（丸岡城主）ら重臣の諫言も聞き入れない。あまつさえ成重を手打ちにしようとした。成重は幕府から遣わされた付家老である。処罰すれば幕府への謀反とみなされるであろう。さすがに成重成敗は見送ったものの、永見右衛門を怒りにまかせて切腹を命じた。右衛門は秀康の後を追って殉死した先代の右衛門の嫡男である。

忠直の乱行はこれに止まらなかった。日々酒に溺れ、家臣を手打ちにした。そのため家臣たちは忠直に近づこうとしなかった。諫言するものさえおらず。藩政も滞る始末だった。ついには勝姫にまで刃を向け、かばった侍女を切り捨てた。

ここに至って秀忠は忠直処分を決断した。「國中政道も穩やかならず」との理由で忠直の隠居と世子・仙千代（後の光長）の家督相続の内意を忠直の生母（清涼院）を通じて伝えた。拒否すれば直ちに討伐、二つに一つである。幕府は本気であった。事実、出羽秋田藩の佐竹義宣に越前出兵の用意を命じている（秋田藩史料）。加賀藩の前田利常にも密かに忠直追討の内命が伝えられていた（加賀藩史料）。

忠直は覚悟していたのだろう、「本望の至り」と淡々と処分を受け入れた。元和九年（一六二三年）二月のことであった。忠直の配流先は豊後府内藩萩原（大分市萩原）。

元和九年三月十五日（一六二三年四月十四日）越前を去り、途中敦賀に滞在し、鬻を落として一伯と号した。忠直に同行したのは侍女三人と世話をする小者のみで士分の同行は認められなかった。正室勝姫は実子の光長、亀姫、鶴姫を伴い江戸に移った。

（福井県史「通史編」より引用）

忠直は五月二日（五月三十日）に敦賀を發ち、同月（日は不明）萩原に着いた。五千石の食い扶持が与えられたが、府内藩と幕府目付けの警護は厳しく軟禁生活を余儀なくされたのである。このとき忠直こと一伯二十八歳、血気ざかりの青年が六十八万石大名から一気に転落して流人の身分に落とされたのである。忠直は萩原で三年暮らし、その後津守（大分市）に移された。その間、侍女の間に二男二女を儲けた。長男が松千代

（後の永見長頼）、次男が熊千代（後の永見長良）、長女おくせ（早世）、次女閑（勘とも）

である。忠直は慶安三年九月十日（一六五〇年十月五日）死去した 享年五十六歳。残された遺児は異母兄の光長（忠直の嫡男。後述）が藩主である高田藩（後述）に引き取られた。

※ 松千代と熊千代の母（侍女）は身分が低かったため、祖母方（秀康の母方）の姓、永見氏を名乗った。

北ノ庄藩解体

元和九年（一六二三年）、北ノ庄藩は九歳の光長が相続した。だが、幕府は幼い藩主では六十八万石の大藩を治めることは無理と判断した。重臣が補佐するにしても、慶長十七年（一六一二年）の久世騒動のような重臣の対立が再発しかねない。事実、藩政は本多富正が仕切っていたものの、反本多勢力がすべて駆逐されたわけではない。結城譜代家臣も健在である。徳川一門の筆頭として北陸の抑えを北ノ庄藩は担っている。その北ノ庄藩の腰が定まらない様では困るのである。

幕府は翌年の寛永元年（一六二四年）、忠直の弟、忠昌（秀康次男）を越後高田藩（二十五万九千石）から北ノ庄藩に移封させた。

ここで越後高田藩について触れておこう。前領主は家康の六男、松平忠輝である。忠輝は川中島藩十二万石の領主であったが、慶長十五年（一六一〇年）越後六十三万石を与えられて七十五万石となり、居城を高田（現上越市）に築いたのである。地勢的に見ると、忠直が治める北ノ庄藩と忠輝が治める高田藩で加賀藩を囲むような形になる。加賀藩を抑え込むために親藩大名の雄を南北に配置したのである。

だが忠輝は家康に疎んじられていた。忠輝の不敵な面魂が嫡男信康に瓜二つで、家康はこれを嫌ったとか、忠輝の傲慢不遜な態度を嫌ったとか伝えられているが真相は不明である。家康は臨終の間際にあっても忠輝の拝謁を許さなかった。将軍秀忠も幕閣も忠輝に厳しい目を向けていた。幕府のキリシタン弾圧政策にもかかわらず、忠輝はキリシタンと接触していた。幕府の財政運営に辣腕をふるいながらも疑惑をもたれていた大久保長安（幕府の金山、銀山を統括した。後、失脚する）と気脈を通じていた。忠輝の正室五郎八姫は油断のならぬ伊達正宗の娘であった。これらが警戒されていたのである。

忠輝に驕りがあった。総大将を命じられていた大坂夏の陣に遅参する、将軍秀忠の旗本を無礼討ちにするなど、幕府、将軍をないがしろにする行為が目についた。さらに朝廷に大坂夏の陣戦勝報告のために、家康と参内するところを病氣理由に参内せず、目と鼻の先の嵯峨野桂川で舟遊びに興じるなど、家康の面目を貶めることさえおこなった。

家康は激怒し以後、忠輝の拝謁を許さなかった。元和二年七月六日（一六一六年八月十八日）家康の死から間もなく、秀忠は弟の忠輝に改易処分を下した。

忠輝は最初に伊勢国、次は飛騨国、信濃国に流罪され、最後は諏訪高島（諏訪市）で天和三年（一六八三年）死去した。享年九十二歳、驚くほどの長命だった。

忠輝の改易処分は北ノ庄藩主、松平忠直の配流処分、元和九年三月十二日（一六二三年四月十四日）の七年前の出来事だった。

余談だが、忠直の配流処分の九年後の寛永九年（一六三二年）、三代将軍家光は実弟の駿府藩（五十二万石）藩主の徳川忠長を改易処分とし、その翌年の寛永十年十二月六日（一六三四年一月五日）、自刃に追い込んだ。

この三つの事件は幕府を軽んじる者は、たとえ血筋であっても厳罰に処すとの峻烈な姿勢を天下に示すものであった。

話を松平忠昌に戻す。越後高田藩、松平忠輝の改易後に入ったのが、信濃松代藩（十二万石）の松平忠昌（結城秀康の次男。兄は忠直）である（越後高田藩七十五万石は分割され二十五万九千石が忠昌に与えられた）。元和四年（一六一八年）のことであった。その忠昌が前に述べたが寛永元年（一六二四年）四月、北ノ庄藩主となる。忠昌は北ノ庄を改め福居とした。前藩主の仙千代（忠直嫡男。後の光長）は、越後高田藩に入った。北ノ庄藩と高田藩の国替である。

さらに、北ノ庄藩領であった大野（五万石）を分離し、弟（三男）の松平直政なおまさに与えた。同じく勝山（三万石）を（五男）結城直基なおもとに、木本このもと（大野市木本。二万五千石）を（六男）松平直良なおよしに与えた。

※ 秀康は長男忠直、次男忠昌、三男直政、四男吉松（早世）、五男直基、六男直良の男子をもうけた。娘は長州初代藩主毛利秀就正室ひでなり、喜佐姫きさひめ。

直基は当初、松平姓を名乗らず結城姓を名乗った。これは秀康の遺言である。秀康の養父、結城晴朝はるともは名門結城氏を残すことを強く願った。晴朝の子供は娘一人で跡を継ぐ男子はいなかった。そのため宇都宮二十一代当主・広綱ひろつなの次男、朝勝ともかつを養子に迎えた。この結果、結城氏、宇都宮氏、佐竹氏の同盟が成立したのである（宇都宮広綱の正室は佐竹氏十七代当主・義昭の娘なんりよいん、南呂院。結城・宇都宮・佐竹氏は宇都宮氏を軸に姻戚関係を結び小田原北条氏に対抗する同盟を成立させた）。同盟は北条氏の圧力に耐え、名門ではあるが弱小大名（十万千石）を存続させる道だった。

だが小田原北条氏の衰退、徳川家康の台頭により、晴朝は新たな決断をしなければならなかった。天正十七年（一五八九年）、秀吉は待望の後継、鶴松（三才で死去）が誕生すると、有力大名から人質として取っていた養子たちを大坂城から去らせた。彼等は実家に戻れず、新たな養子先を探さねばならなかった。家康の次男、秀康もその一人であった。徳川宗家の後継はすでに秀康の弟、秀忠にとの暗黙の了解が重臣の間にあった。秀康が秀吉の養子となり一時的にせよ豊臣姓を名乗ったことにより、後継の資格を失ったのである。秀康が徳川家に戻れば、秀忠と対立し、徳川家に亀裂が生じる、秀康は他家に養子にゆくより他に道はなかった。

秀康の養子先として名乗りをあげたのが結城晴朝であった。そのために朝勝との養子関係を解消し、宇都宮氏に戻している。晴朝は水戸城主・江戸重通しげみつの娘鶴姫を養女とし、秀康と鶴姫とを娶とわせ、結城家を秀康に継がせたのである。秀吉、家康に異論のあるはずもない。徳川氏からの脅威を取り去り、秀吉の覚えもめでたいとあれば、結城家の将来は盤石のように見えた。

しかし徳川家の天下になり、結城氏断絶の危機がおとずれた。徳川家の血筋の者は大名跡、松平姓を名乗ることが慣例になったのである。

秀康は結城姓を生涯名乗っていたが、嫡男忠直は松平氏を名乗ることが決定されてい

た。秀康で結城姓が絶える。このことを憂いた晴朝は秀康に子のいずれかに結城姓を名乗ることを申し入れたのであった。秀康は義父の申出を受け入れた。

秀康は五男の五郎八^{いるはち}を晴朝の養子とし、結城姓を継がせさせた。後の直基^{なおもと}である。

※ 直基は当初、結城姓を名乗っていたが、晴朝の死後、松平姓に復した。御家門としての処遇を得るためである。

話を戻そう。北ノ庄藩は福居藩（後に福井藩）と改称され、六十八万石の領地から大野、勝山、木本が外され、丸岡（藩主は本多成重）が独立した。大野藩（五万石）、勝山藩（三万石）、木本藩（二万五千石）、丸岡藩（四万六千三百石）が削られたのである。さらに敦賀郡が幕府領となり（後に小浜藩に編入される）、北ノ庄藩六十八万石は福居藩五十万二百八十石に削減された。（後に木本藩が返還されて五十二万五千二百八十石となる）

領地の減少だけではなかった。家臣団にも激変があった。福居藩は忠昌が連れて来た越後高田藩の家臣団と本多富正が選んだ家臣団で編成された。それ以外の北ノ庄藩家臣の動向だが、多くが光長に従って越後高田藩（二十五万九千石）に行き、その他の家臣も直政に従って大野へ、直基に従って勝山へ、直良に従って木本へ赴く者に別れたのである。又、本多成重を頼り、丸岡藩士となった者もいた。

柿原郷多賀谷氏 廃絶

多賀谷一族は室町前期（一三九〇年代）より結城氏の家臣であった。群雄割拠の戦国時代、多賀谷一族は結城氏を離れ独立の道を歩むが、秀康が結城家を相続すると秀吉の命令により、多賀谷左近三経^{みつね}はその家臣となった。左近三経は柿原郷三万二千石を拝領し、結城氏譜代家臣の筆頭格として処遇されていた。だが、三経の嫡男・泰経が元和二年（一六一六年）十九歳で死去すると柿原郷多賀谷氏は改易された。

※ 松平忠昌が藩主となると、福居藩の家臣は忠昌の直参と本多富正が率いる徳川系家臣団によって占められた。松平忠昌分限帳^{ぶんげんちよう}（家臣の地位、禄高、役職を記した名簿）

に柿原郷多賀谷氏当主の経政^{つねまさ}（泰経^{やすつね}の養子）の名はない。柿原郷多賀谷氏は断絶していたのである。

多賀谷氏に不幸な出来事が続いていた。多賀谷左近三経^{みつね}は慶長十二年七月二十一日（一六〇七年九月十二日）に死去している。生年は天正六年（一五七八年。高橋恵美子著「多賀谷氏における家伝」より）だから享年は三十歳になる。だが福井県史、金津町史ともに享年四十一歳としている。その根拠とするのは越前史略（藩史）の記載による。

「慶長十二年七月二十一日 四十一歳ニテ卒ス 邑ノ西ニ葬ル 其子 左近ヲ継グ

後故アリテ祀ヲ絶ツ」

(訳) 多賀谷左近三経、慶長十二年七月二十一日(一六〇七年九月十二日) 四十一歳にて死去。柿原郷の西方の地に葬られる。その子は左近を名乗り家督を継ぐ。後に故あり、三経の菩提を弔うことが途絶えた。

とすれば左近三経の生年は一五六七年(永禄十年)となる。三経の父、重経の生年が永禄元年(一五五八年。多賀谷氏における家伝より)だから、重経九歳のときの子となる。これには無理がある。やはり享年は三十歳であろうか。いずれにしても早死にである。

左近三経の後継は泰経である。泰経についての文献はほとんどない、生年も不明である。家督を継いだとき、おそらく十歳に満たなかったであろう。泰経以外にこどもがあったかどうかは不明である。記述が見当たらない。その泰経は父よりさらに短命であった。

多賀谷家伝の記述。

虎千代 左近 忠直公ニ従ヒ大坂御陳高名アリ深手ヲ負フ

元和二年 丙辰五月七日十九歳ニテ卒 墓下妻多密院ニ在

(訳) 幼名虎千代(多賀谷宗家の嫡男は代々虎千代を名乗る)。元服して左近(左近泰経)を名乗る。忠直公に従い大阪の御陣にて手柄あり。戦場で深手を負う。元和二年丙辰五月七日(一六一六年六月二十日)、十九歳にて死去。墓は下妻城下の多密院に在り。

※ 大坂夏の陣で左近泰経は首級三十八をあげ、あっぱれ武勲を輝かせた(多賀谷家伝)。首級三十八といわれる数の真偽はともかく、血気盛りの泰経は戦場で刀槍を振るい奮戦したのであろう。その結果深手を負ったとの記述である。

父、左近三経の死から九年、大坂夏の陣、豊臣家滅亡の慶長二十年閏年五月七日(一六一五年六月三日)の、まさに一年後である。大坂夏の陣で深手を負ったという記述から、傷の悪化が原因であろうか。十九歳の壮健な当主の死、しかも実子はいない。宗家断絶の危機である。重臣たちは右往左往したのであろう。

※ 藩への届け出より以前に泰経は死去していた可能性がある。後継ぎが定まらず、延び延びになりタイミングを図って（大坂の役一年後）の届けとなったのであろう。

急遽重臣の中から養子を立てた。経政である。

多賀谷家伝の記述

虎千代 左近又ハ内記氏 実ハ泰経弟実子ナキニ付養子 故有之跡目不被下流浪

寛永十五 戊寅年六月廿八日卒 墓 福井城下乗國寺ニアリ

（訳）幼名虎千代 左近または内記氏を名乗る 実ハ泰経弟実子なきに付き養子なり。

故あり跡目を継ぐこと許されず浪人となる。寛永十五年戊寅年六月二十八日（一六三八年七月二十九日）死去 墓は福井城下の乗國寺にあり。

・・実ハ泰経弟実子ナキニ付養子・・の解釈だが 実ハ（経政は）泰経の弟で実子なきにつき養子となるとも読める。別の解釈として 実ハ泰経に弟、実子がなく（経政は）養子であるとも読める。

いずれにしても経政の出自は不明である。結局、経政の相続は許されず、柿原郷多賀谷氏は断絶した。仮に泰経に実子の後継がいたとしても多柿原郷多賀谷氏が福居藩の家臣として存続することは不可能だった。

慶長十八年（一六一三年）、北ノ庄藩は坂北郡金津に金津奉行を置き、森宗右衛門（千石）を初代奉行に任じている。金津奉行所には鉄砲組二十六人が配置されており、坂北一帯の治安維持、国境の警備、往来の監視が主な任務である。当時、坂井郡は（九頭竜川の）川東を坂北郡、川西を坂南郡に別れており、越藩史略にも「坂北郡は国の北にして、街道その中にあり、南北の直径金津を郡の中心とする」と記されている。慶長十八年以降、明治維新まで坂井・吉田郡は北ノ庄藩～福居藩～福井藩の金津奉行支配下に置かれていたのである。

慶長十八年という年は久世騒動の翌年である。むろん左近泰経は健在であった（泰経の死は二年後）。この時点で柿原郷を含む坂北一帯は北ノ庄藩の支配下にあったことを示している。柿原郷多賀谷氏は既に坂北一帯の領主ではなかった。

左近三経の死（一六〇七年）に伴い、十歳の泰経が家督を継いだ時から、柿原郷を含む坂北郡は北ノ庄藩の支配下に置かれるようになったのであろう。柿原郷三万二千石は左近三経までで、三経の死後、領地の多くが北ノ庄藩に没収されていた。

さらに前述のように北ノ庄藩は後に忠昌が越後高田から連れてきた直参と本多富正

を頂点とする徳川系家臣団が中心となり、それ以外は排除された。結城秀康、松平忠直、松平光長の北ノ庄藩に仕えてきた藩士五百有余名のうち、福居藩に残った旧藩士は本多富正が選抜した百五名（家臣禄より）に過ぎなかったのである。

まして柿原多賀谷氏は先の久世騒動で富正の政敵、今村盛次についた。騒動の後始末では関与の度合いが薄く、泰経も若年（十五歳）であったことから処分は見送られたものの、（あるいは金津奉行設置が処分であったかも知れない）富正に疎んじられている。松平忠昌、本多富正による福居藩の新体制下に組み入れられることはなかった。

（本多富正は金津に居城を築くことを忠直に願い出ている。忠直が同意していた書状も残っている）、富正が坂北郡に野望を抱いており、そのことが多賀谷氏を断絶に追い込んだ理由との説もある。だが、富正は己の野心で動く男ではなかった。

※ 忠直騒動の後、北ノ庄藩から丸岡を分離させ本多成重に丸岡藩（四万六三〇〇石）を立藩させたのだが、その際、富正にも府中藩（四万五千石）立藩の話があったのだが、富正は固辞し北ノ庄藩筆頭家老として留まった。

富正が願い出た金津城築城はあくまでも加賀前田藩に対する備えであった。結局、実現しなかったのだが、その理由は加賀前田藩の歴代藩主が徳川家と婚姻関係を結び、脅威が取り除かれたからである。

※ 加賀藩二代藩主利常としつねの正室が徳川秀忠次女・珠姫たま。その子・光高みつたかが三代藩主となり、光高は水戸藩初代藩主徳川頼房よりふさの四女で徳川三代将軍家光の養女・大姫おおひめを正室とした。その子・綱紀つなのりが四代藩主となり、家光の異母弟の保科正之ほしなまさゆきの娘・摩須姫ますひめを正室とした。それ以降も加賀前田藩は徳川家と婚姻関係を結び外様大名ではあるが、徳川家との絆を強めていった。

加賀藩の脅威は薄められ、備えとしての金津城築城は目的を失ったのである。それはとりもなおさず越前加賀国境警備のために配された柿原郷多賀谷氏の存在意義も失われたということでもあった。平時の領地支配は奉行所だけで十分なのである。当主・泰経の死、後継不在によって柿原郷多賀谷氏は断絶に追い込まれた。当然の帰結といえよう。

柿原郷の多賀谷一族のその後はどうなったのだろうか。光長に従って越後高田藩に赴いた者もいた。結城氏を相続した直基なおもとの家臣となった者もいた。祖先の地、下妻に帰郷した者もいた。福井藩士として残った者もいた。武士は捨てたが越前に残った者もい

たであろう。

- ※ 結城秀康分限帳には左近三経以外に多賀谷姓を名乗る家臣として多賀谷権太夫（二〇五〇石）、多賀谷式部（二百石）、多賀谷将監（二百石）、多賀谷徳千代（百五十石）、多賀谷鞠負（百五十石）の名前が見える。左近三経系多賀谷氏の支族である。
- ※ 越後高田藩の家臣禄に多賀谷内記（千石）の名前がある。

跡目を継ぐことを許されず浪人となった経政は不遇の生涯をおくったが、その子、経栄については短く記述されている。

虎千代 左近修理 松平大和守直矩公ニ仕フ 川越多賀谷家祖

（訳）幼名虎千代。元服して左近修理を名乗る。松平大和守直矩に仕えた。川越多賀谷氏の祖となる。

経栄は直基の嫡男松平大和守直矩に仕え、川越多賀谷氏の初代となった。その子孫は家老職を輩出する家柄となり、家系は明治維新まで続いた。

以上、柿原郷多賀谷氏が廃絶に至った理由と、その行く末である。

尚 柿原の専教寺は柿原郷多賀谷一族の菩提寺であるが、七世了西についての記述がある。これを解説して「戦国非情 結城氏・多賀谷氏 伝」を閉じたい。

「釈了西法師は当初多賀谷左近の二男にて、多賀谷光之助といふ仁にて候。二十四歳にて当時第七代の現住（住職）と相成り寺務つつがなく候。処折悪しく慶長年中多賀谷城主に兵乱多し、よって近辺の檀中（檀家）三百余人引具し（ひきつれて）罷り出で候。処、忽ち落城に付、住僧（住職。了西）も共に逐電し、当寺も没落し廢寺の体と相成るとなん。

その後数年経て、寛永四年（一六二七年）の秋、住僧五十五歳、並に一子了光なりしを引きつれ帰山し、専教寺再建の志願これあり候へども、門徒など各々散乱して、ようやく五十軒ばかり残りまかりあり、これを取立てわずかに小堂一字造立し、多賀谷の菩提を弔はんがため相續しけり」

多賀谷左近三経には泰経以外に子があったという記述はない。なによりも寛永四年

(一六二七年)に五十五歳とすれば三経の没年(一六〇七年)は三十五歳となる。伝聞に基づく記述であろうが史実と異なる。

光之助とは重経の二男(左近三経の弟)忠経ただつねのことを指すのであろうか。ただ忠経に関する記述は多賀谷系譜でも見当たらない。

※多賀谷家伝に僧侶がいたとの記述がある。但しそれにはこう記されている。

奥州一族ノ方ニテ早世 (佐竹一族の方にて早世)

いずれにしても了西と特定できる人物の存在は史料から見当たらない。

慶長年中多賀谷城主に兵乱多しとの記述についてだが、多賀谷氏が外部から攻められたという史実はない。一族内で争いがあったという史実もない。考えられるのは慶長十七年(一六一二年)に福井藩で勃発した久世騒動に多賀谷左近泰経が巻きこまれたという史実である。ただ多賀谷氏が戦闘に加わったという史実はない。まして一揆ならともかく、檀家が武士の争いに加わることはない。

あるとしたら柿原郷の支配が多賀谷氏から福居藩金津奉行に移った際、柿原百姓衆と奉行所の間でもめごとがあり、一揆騒動に発展し、百姓衆が根城とした専教寺が破却された、・・それは考えられる。

尚、久世騒動に多賀谷氏側で参陣したのは重臣の武者奉行であった丹下長左衛門たんげちやうざゑもんである。これらの史実を錯誤しているのではないか。記述に疑問はあるが、柿原郷多賀谷一族の改易、廃寺になった経緯、左近三経が長らく祀られなかった理由を考察する上で専教寺史は興味深い。史実に照らし合わせ、専教寺史を解釈すると以下ようになる。

「北ノ庄藩で藩を二分する争いが起こった(久世騒動)。本多富正と今村盛次の争いである。多賀谷左近泰経は武者奉行、丹下長左衛門に兵三百余を預け今村盛次の屋敷を守らせた。争いは藩内で収まりがつかず、幕府の裁定を仰いだ。その結果、本多富正が勝利し、今村盛次一派は越前追放処分を受けた。

争いが決着した後、今村盛次に味方した柿原郷多賀谷氏は窮地に陥り、その翌年、坂北郡は福居藩金津奉行の支配下に置かれた。

柿原郷は多賀谷左近三経、泰経が治めていた頃は穏やかな郷村であったが、金津奉行が差配さはいするようになると何かと不便になり、日々の仕事、暮らしに支障が生じるようになった。たまりかねた百姓衆は専教寺に集まり対策を講じた。その結果、住職の了西を通じて奉行の森宗右衛門に申立書を提出することになった。了西は多賀谷一族の者であり、出家前は光之助と称し、出家して了西を名乗った。専教寺七代である。専教寺は浄土真宗の寺院で、多賀谷左近三経が柿原郷領主となった際、多賀谷氏の菩提

寺とした。それまでは柿原郷の小寺であったが、左近三経は伽藍建立、田畑の寄進を通じて専教寺の隆盛に尽くした。一族の光之助（了西）が七代に継いだのは、そのような経緯からである。了西はそれまでつつがなく寺務を遂行していたのだが、百姓衆の依頼を引き受けることにより立場が一変した。

奉行・森宗右衛門は百姓衆の申立書は了西の扇動によるものとし、その背後に金津奉行設置に不満を持つ柿原郷の多賀谷一族が存在すると捉えた。申立ては即座に却下。吟味されることなく却下されたことに百姓衆は怒り、徒党を組み奉行所に押し掛け、申立てを取り上げるよう迫った。これらの行為を奉行は一揆、強訴ごうその類とし追い払った。怒った百姓衆は専教寺に集合し奉行所を襲わんと氣勢をあげた。それを察知した宗右衛門は先手を打って専教寺を襲い、破却した。さらに了西を騒動の首謀者として捕えようとしたが了西は加賀国に逃れた。

専教寺再建は奉行所が許さなかった。元和二年丙辰げんな ひのえたつ（一六一六年六月二十日）、当主左近泰経が死去すると柿原郷多賀谷氏は廃絶となり、家臣各々が各地に離散した。一族が去った柿原郷で、専教寺は朽ち果てた。一揆騒動の経緯から領民は多賀谷一族を祀ることさえ憚ったのである。

寛永四年（一六二七年）、了西は一子了光を伴い帰郷し、専教寺の再建を目指したが、門徒は廃寺を離れ、再建は困難を極めた。ようやく五十軒ばかりの門徒を訪ね、寄進を受けささやかながら一字を建立し、多賀谷一族の菩提を弔った。その後は了光が引き継ぎ、それ以降も代々の専教寺住僧が多賀谷一族の菩提を弔っている」

史実に照らし合わせ専教寺再興物語を創作したのだが、どうであろうか。

戦国非情 結城氏・多賀谷氏 伝 第二部 終

参考資料 関城町史 下妻市史 福井市史 福井県史 金津町史 細呂木村史
結城系譜 多賀谷系譜 松平大和守系譜 他資料。

資料引用 福井県史「通史編」
福井県郷土叢書 忠直年譜

